

花ス、キを取りて、ミヌサを奉るといふ是也と見えけり、日本紀には野薦の字ス、とよむを、纂疏には薦は小竹之名と註せられたり、万葉集抄の説によれば、ス、は、ス、キ也、纂疏之説に依れば、ス、といふは猶小竹よむでサ、といふが如し、いづれか是なる事を知らず、

〔松の落葉一〕す、き

す、きとは、あつまり生しげりたる草をいひし事にて、和名抄にも草聚生曰薄といへり、又日本書紀神功皇后の卷に、幡荻穂出吾也、孝德天皇の卷に、三河大伴直蘆とありて、荻蘆のもじを、ともにす、きとよめるも、あつまり生るゆゑにこそ、さて乎花はものよりことにあつまり生しげれば、中むかしよりはおのづからに、此草の亦の名のごとくなれるなるべし、

〔八雲御抄草三上〕薄

をばな はな しの むら いと 一むら 一もと 一はた万 いとす、き 俊頼難之 しの、を薄 さきのをすくろと云は、春やけたる也、すくろのす、き同事也、

しのす、きはた、薄の名也、ほにいでぬと云正説也、しの薄ほにいづといへる歌多、但ほにいでぬ、ほにいづるといふに同事也、又源氏にも、あきのすゑにほにいづといへり、又源氏にほに出ぬもの思らししの薄 後撰にす、きをみならぬといへり 同集棟梁はなす、きをよともすればといへり、源氏にをばなの物よりことにてをさしいで、まねくと云り、おほかたまねくとほにいで、まねくそでににたる也、

〔萬葉集一 雜歌〕額田王歌 未詳

金野乃美草 荻葺屋杼禮里之 兔道乃宮子能借五百磯所念

〔萬葉集抄一〕みくさとはず、きなり、此歌點にも、或はおばなかりふきとも、或はみくさかりふきとも點之、此歌にはみくさと點せる殊宜也、みくさといふは、もろくの草の中に、たかくおしき草なるがゆへに、眞草の義にて、みくさと云べし、難云、たかくお、しきによらば、萩葺等